

令和元年6月24日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04741

研究課題名(和文) 在日コリアンを対象とした外国人児童生徒教育の教員研修会にみる教師の専門性

研究課題名(英文) The Effect of Professional Conferences on Developing Specialized Skills for Foreign Student Education Among Zainichi Koreans

研究代表者

磯田 三津子 (ISODA, MITSUKO)

埼玉大学・教育学部・准教授

研究者番号：10460685

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、在日コリアンを対象とした在日外国人児童生徒教育(以下、外国人教育と称す)における教師の専門性について、外国人教育に関する教員研修会の内容を通して考察した。そのために、本研究では、外国人教育に関する自治体の教員研修会を中心に実践報告を収集し、教師への聞き取りを行った。その結果、次の三点が教師の専門性として明らかとなった。第一は、教師が在日コリアンの子どもたちをめぐる課題は何かをクラスに在籍する子どもを通して理解を深めることができることである。第二は、日朝関係に関する通史を教えることである。第三は、在日コリアンの文化を教材とした実践等を通して多様性を尊重できる学級づくりを行うことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

今日の日本の学校には中国、フィリピン、ブラジルといった多様な国の子どもが在籍するようになっている。学校では、多くの場合、日本語をはじめとする適応教育が行われている。一方で、彼らの国や民族の文化や歴史の学習についての学習の在り方やその意義についてはほとんど言及されていない。在日コリアンを対象とした教育実践からは、子どもたちの国や民族についての理解を深めるための教育実践の在り方を学ぶことができる。本研究で明らかにした教師の専門性は、現在の教師にもつないでいく必要がある。本研究で明らかにした教師の専門性に関する具体的な視点は、ニューカマーの子どもたちをめぐる外国人教育を考える際の基盤となる。

研究成果の概要(英文)：This research discusses specialized teachers' foreign student education competency by analyzing the content of professional conferences; for this, Zainichi Korean students have been targeted. In order to determine this, I examined teachers' reports, which described their practices for Zainichi Korean students, and interviews with teachers who belonged to a research group on foreign student education. As a result, this research reached the following conclusions: (1) teachers should acknowledge the issues and problems faced by Zainichi Korean students and their families in their communities; (2) teachers need to have the appropriate knowledge and skills to teach Japanese and Korean history; (3) it is necessary for teachers to be competent so that they can create a classroom atmosphere wherein Zainichi Koreans and Japanese respect each other by teaching these students the various aspects of Zainichi Korean culture, such as songs, children's games, food, and fashion.

研究分野：教育学

キーワード：在日外国人児童生徒教育 在日コリアン 教員研修会 教師の専門性

1. 研究開始当初の背景

(1) 在日コリアンを対象とした外国人教育の概要

在日コリアンを対象とした在日外国人児童生徒教育は、1960年代に大阪府で始まった教育実践である。近年、ニューカマーを対象とした教育に関する実践が展開されている。その基礎となっているのが、在日コリアンを対象とした外国人教育である。

本研究は、外国人の中でも在日コリアンに焦点を当てる。なぜならば、在日コリアンを対象とした外国人教育は、1960年代から今日まで数多くの実践を蓄積してきたからである。在日コリアンを対象とした外国人教育は、現在も、全国外国人教育研究協議会(以下、全外教と略す)、全朝教大阪(考える会)、京都市小学校外国人教育研究会、奈良県外国人教育研究会、大阪府在日外国人教育研究協議会、兵庫県外国人教育研究協議といった西日本における教員研修会を中心に報告され、議論が展開されている。

(2) 課題意識とこれまでの研究蓄積

外国人教育に携わる小・中・高等学校の教師は、1960年代から今日まで、外国人教育を対象とした教員研修会を組織してきた。教員研修会では、在日コリアンの子どもをいかに指導するのか、そして在日コリアンの子どもが在籍するクラスでどのように授業実践することができるのかといった観点から多くの議論が蓄積されてきた。しかし、これまでの外国人教育に関する先行研究において教員研修会や教師の専門性を対象としたものは存在しない。そこで、本研究では、在日コリアンを対象とした外国人教育に関する教員研修会の中での提案されてきた授業実践及び、そこでの議論を通して、在日コリアンの子どもを対象とした学習指導における教師の専門性を明らかにすることを目的とした。

これまで、私は、自治体が策定した「外国人教育方針・指針」(以下、方針・指針と略す)とそれに基づいて行われた授業実践について研究をしてきた。ここで明らかになったことは、2015年までに、全国76の自治体が方針・指針を策定してきたこと、そして教師及び、各学校は、そこで明らかにされた方針・指針にしたがって外国人教育を行ってきたことである。

しかし、方針・指針は、外国人教育に関する目的・目標が記されたものであり、具体的な教育内容や教育方法は記されていない。その具体的な教育実践のあり方を明らかにし、教師に伝達する役割を担っているのが教員研修会である。私は、これまでの研究において、方針・指針の収集とそれに従って展開されてきた実践を参観し、外国人教育の研修集会に参加する教師からの聞き取り調査等を行ってきた。外国人教育に関する教員研修会に参加し資料を収集し、聞き取り調査を引き続き行うことで、前述した研究目的を明らかにできると考えた。

在日コリアンの教育と教師の取り組みについて論じられた先行研究には例えば以下の先行研究がある。

- 稲富進「多民族・多文化共生の明日を拓く在日朝鮮人教育の今日的課題」(『人権問題研究資料』17、近畿大学人権問題研究所、17、74-115頁、2003年)
- 稲富進「多民族/多文化共生をめざす在日外国人教育の展望-在日朝鮮人教育の何を継承するか」(『解放教育』34 13、明治図書出版、43-50頁、2004年)

上述した先行研究には、在日コリアンを対象とした外国人教育の歴史的展開及び、在日コリアンの民族的アイデンティティを形成するための教育実践のあり方が記されている。外国人教育の変遷、現在の実践状況及びその成果と課題を理解するためには重要な先行研究であるといえる。しかし、これらの先行研究は、外国人教育の教員研修会及び、教師の専門性について焦点を当てた研究ではない。

(3) 研究期間内に何をどこまで明らかにしようとしたのか

本研究の研究期間は3年間である。3年間のうちに以下の5点について研究できるように研究計画を立てた。

民族的マイノリティを指導する教師に必要とされる専門性とは何かについて理論的に明らかにする。米国の教育学研究者ラドソン ビリングス(G. Ladson-Billings)は、著書 *Crossing Over to Canaan: The Journey of New Teachers in Diverse Classrooms* (2009年)、*The Dreamkeepers: Successful Teachers of African American Children* (2009年)の中で、民族的マイノリティと教員養成のあり方について論じている。本研究では、民族的マイノリティを指導する教師のあり方を示したラドソン ビリングスの「文化的に適切な指導」(Cultural Relevant Teaching)の考え方を検討し、民族的マイノリティを指導する教師の専門性とは何かについて理論的に明らかにする。ここで明らかにした内容は、教員研修会及び、教師へのインタビューの内容を分析するための枠組みとする。

全外教の教員研修会資料、『むくげ』(全朝教大阪)及び『ともに』(兵庫県外協)に掲載された報告内容に基づいて、1960年代から現在にかけて、教師の専門性がどのように変化をしてきたのかについて、年代ごとにその特徴を考察する。

京都市外国人教育研究会、奈良県外国人教育研究会、大阪府在日外国人教育研究協議会、兵庫県外協、全朝教大阪の教員研修会への参加、教師へのインタビューを行い、現在の外国人教育に求められている教師の専門性について明らかにする。

全児童の半数以上が在日コリアンである大阪市立の小学校における外国人教育の研修会に参観するとともに、教師へのインタビューを行う。そして、在日コリアンの子どもが通う小学校における教師の専門性を明らかにする。

以上を踏まえ、教員養成課程の学生が学習することのできる授業を構想する。具体的には、埼玉大学教育学部の科目「教育方法学概説」(1回分)、「教育臨床学入門」(3回分)を対象に外国人教育における教師の専門性に関する授業を構成・実践し、考察する。

2. 研究の目的

本研究の目的は、在日コリアンを対象とした外国人教育における教師の専門性を教員研修会の内容を通して明らかにすることである。具体的な目的は、以下の3点である。

- (1) 1960年代に始まった外国人教育に関する教員研修会の成果をまとめた報告書を収集し、その内容を検討することを通して、年代ごとに強調された教師の専門性を明らかにすること。
- (2) 今日、外国人教育の教員研修会で議論されている内容及び、教師への聞き取り調査を通して、外国人教育において必要とされている教師の専門性を学習指導の観点から検討すること。
- (3) 教員養成課程の学生を対象に、外国人教育における教師の専門性を内容とした授業を構想・実践し、考察を行うこと。

3. 研究の方法

本研究の方法は、次の四点である。(1) 在日コリアンの教育に関する先行研究を収集し、本研究の理論的根拠となる考え方を明らかにすること。(2) (1)にあげた理論的根拠にしたがって、外国人教育に関する研究会や協議会を有している西日本を中心とする自治体の研修会における実践報告を収集し、分析すること。(3) Z市小学校外国人教育研究会のメンバーへの聞き取り調査を行い、その内容を考察すること。(4) Z市小学校外国人教育研究会(以下、外教研と称す)が行っている授業実践研究会の内容及び、研究会が作成した6年社会の歴史の授業に関する指導資料集の内容を分析すること。

4. 研究成果

本研究は、前述した研究の目的にしたがって以下の四つのテーマに基づいて研究を進めた。

- (1) 在日コリアンを対象とした本名をめぐる教育実践と教師の力量形成 外教研主催の研修会をめぐる
- (2) 外国人教育に取り組む教師の動機と経験 外教研に所属する8名の教師をめぐる
- (3) 外国人教育に関する研究集会にみる多文化共生教育 教育実践に関する報告内容の検討を通して
- (4) 6年社会科における在日コリアンを対象とした外国人教育の特質 外教研が開発した日朝関係史に関する指導資料集の検討を通して

得られた成果を以下に示す。

- (1) 在日コリアンを対象とした本名をめぐる教育実践と教師の力量形成 - 外教研主催の研修会をめぐる

1981年に発足したZ市の小学校教師と元教師から構成される外教研は、発足以来の主要な目的として本名を呼び名乗ることのできる学校・教室の実現を掲げている。本名を呼び名乗る教育実践は、1970年代に大阪府で始まり、その後、Z市を含む全国に広まっていった。本名に関する取り組みは、今日においても、在日コリアンを中心とした外国人教育を実践する際の重要な目的として位置づけられている。

そこで、本研究では、在日コリアンの子どもたちの本名を呼び名乗る教育実践の考え方と、その考え方によって、教師にはどのような力量を形成することが必要とされていたのかについて明らかにすることを研究目的とした。そのために、ここでは、外教研の研修会で議論されている内容に焦点を当て考察を進めた。

その結果、以下の4点が明らかとなった。第一は、本名を呼び名乗る学級・学校づくりとは、在日コリアンの子どもが本名を隠すことなく用いることが可能となるような差別や偏見のない学級・学校の実現を意味するということである。第二は、学校・教室の中の子どもの間に民族差別があるという事実を知り、それを解決するために取り組むことの必要性を教師が認識することである。第三は、韓国・朝鮮の民話、物語、あそびを教材として韓国・朝鮮に親しみ、肯定的なイメージを形成することができる教育実践を行うことである。第四は、日朝関係を社会と外国人教育双方の学習内容を取り入れた近現代史の授業実践を行うこと

である。

(2) 外国人教育に取り組む教師の動機と経験 外教研に所属する8名の教師をめぐって

Z市において、外教研への参加は任意であり、現在20名程度の教師が所属している。外教研は、発足以来、外国人教育の課題である外国につながるのある子どものアイデンティティ形成、そして彼らに対する日本人の子どもの差別や偏見の排除に向けた教育に関する実践・研究も取り組んできた。

本研究では、教師がいかなる経験によって外国人教育に意味を見いだし、継続的な実践・研究に携わるようになるのか、その契機と社会的背景について明らかにすることを目的として研究を進めた。そのために、外教研で中心的に活動してきた8名の教師と元教師に対する半構造化インタビューを行い、その内容を考察した。その結果、本研究で、インタビュー調査対象とした8名のうち6名の教師が担任するクラスに在籍する在日コリアンの子どもの出会いによって、差別に関わる問題を認識し始めていた。それは、例えば、在日コリアンの子どもの問題行動を起こしたとき、出自を隠していたとき、家庭訪問に行き子どもが置かれている状況を知ったときなどであることが明らかとなった。

(3) 外国人教育に関する研究集会にみる多文化共生教育 - 教育実践に関する報告内容の検討を通して

本研究は、1980年代より外国人教育の研究・実践に取り組んできた全外教に所属する教師がどのように多文化共生教育を考えてきたのかを考察し、その成果と課題を明らかにすることに基づいて研究を進めた。その結果、全外教の考える多文化共生教育は、外国につながるのある子どもの国や民族に関わるアイデンティティの形成をめざすことを中心とした実践であるということが明らかとなった。具体的には、子どもたちが国や民族に関するアイデンティティを形成することで、自らを肯定し、差別にも抗える力を身につけるという取り組みである。それは、アイデンティティ・ポリティクスと呼ばれる取り組みであると考えることができる。こういった取り組みは、在日コリアンをはじめとする外国につながるのある子どもたちに国や民族という側面から自分自身に誇りもち、日本人の中で自信をもって生きていくことのできる力を養うことができるという点において意味がある。

しかし、そこでは、外国につながるのある子どもの差異が強調される傾向にあり、外国と日本の文化が複雑に混ざり合った状況や個人のアイデンティティの複雑さには触れられることはない。そして、こうした差異を強調する教育実践において、日本人の子どもたちに期待されるのは、国や民族の歴史やことば、文化を学び、外国につながるのある子どもたちを理解することである。そのことは、外国につながるのある子どもを理解するというよりはむしろ、外国や他の民族を理解するという点においては意味がある。外国につながるのある子どもたちの複雑なアイデンティティは、国や民族の枠組みの中だけでは理解することはできない。こうした複雑な個人をどのように捉えていくことができるのかを考えることは多文化共生教育の重要な課題であるといえる。

(4) 6年社会科における在日コリアンを対象とした外国人教育の特質 外教研が開発した日朝関係史に関する指導資料集の検討を通して

本研究は、6年社会科、中でも日朝関係史を教材として開発された外国人教育の授業実践の特質について検討することを通して、社会科における外国人教育の現状と、その可能性を明らかにすることを目的とした。そのために、外国人教育について研究・実践してきた教師や研究者の考えに基づいて考察の視点を設定し、外教研が6年社会科を対象に構想した『外国人教育指導内容試案』を考察した。その結果、以下の2点が明らかとなった。第一は、近代以降の侵略をめぐる歴史だけではなく、近代以前の日朝の友好関係について系統的に学習できるように授業を行うことの必要性である。特に、近代以前の歴史においては、朝鮮の文化の豊かさや、朝鮮の人々との交流を教材とすることが韓国朝鮮についての子どもたちの肯定的なイメージを形作るのに適している。第二は、歴史における人物の学習の重要性である。人物の学習については、その歴史の場面において「その人物が何を感じたか」「その人物の行動から何を学べるか」といったことを想像し、考え、議論するという特徴がある。したがって、その人物を通して歴史を学ぶというよりも、むしろ日朝の狭間に立たされた人物の行動の意図や考えを想像し、子どもたち自身が、在日コリアンに対する自らの考え方や行動について捉え直していこうとする学習である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

磯田三津子、韓国・朝鮮の民俗芸能と出会い、民族のルーツを探る 京都市立凌風学園の「コリアみんぞく教室、音楽教育実践ジャーナル、査読無し、Vol 15、2017、pp. 72-75。

DOI: https://doi.org/10.20614/jjomep.15.0_72

磯田三津子、在日外国人児童生徒への差異を尊重した教育、教育と医学、査読無し、66(1)、2018、pp.62-69。

磯田三津子、在日コリアンを対象とした本名をめぐる教育実践と教師の力量形成：Z市小学校外国人教育研究会の研修会をめぐって、埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要、査読無し、Vol 17、2019、135-142。

DOI:https://sucra.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=18578&item_no=1&page_id=26&block_id=52

〔学会発表〕(計5件)

磯田三津子、韓国・朝鮮の民族芸能による在日コリアンのアイデンティティ形成 大阪市立御幸森小学校の民族学級の実践を通して、日本音楽教育学会、2016年。

磯田三津子、在日コリアンを対象とした在日外国人児童生徒教育における教師の専門性 Y市小学校外国人教育研究会の教員研修会をめぐって、日本教師教育学会、2017年。

磯田三津子、在日外国人児童生徒教育における教師の経験と教員研修会 X市小学校外国人教育研究会をめぐって、日本教育方法学会、2017年。

磯田三津子、多文化共生をめざす在日外国人児童生徒教育の成果と課題 Z市在日外国人教育研究会が開発した授業実践の検討を通して、日本教科教育学会、2018年。

磯田三津子、在日外国人児童生徒教育の研究集会にみる多文化共生教育 - 教育実践に関する報告内容の検討を通して、日本教育方法学会、2018年。

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。